

各関係機関の長  
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター所長

平成 2 5 年度病害虫発生予報第 1 号について  
平成 2 5 年度病害虫発生予報第 1 号を発表したので送付します。

## 平成 2 5 年度病害虫発生予報第 1 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。  
**発生予報の概要**

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	記載ページ
早期水稲	1 葉いもち	並	2
	2 イネミズゾウムシ	やや少	2
	3 スクミリンゴガイ	やや多	2
冬春きゅうり	1 べと病	やや多	2
	2 うどんこ病	並	2
	3 褐斑病	やや少	3
	4 ミナミキイロアザミウマ	並	3
	5 黄化えそ病 (MYSV)		3
冬春ピーマン	1 うどんこ病	並	3
	2 斑点病	やや多	3
	3 アザミウマ類	やや多	4
冬春トマト	1 灰色かび病	並	4
	2 葉かび病	並	4
	3 タバココナジラミ類	並	4
	4 トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	前年・前々年と同程度	5
野菜・工芸作物全般	1 アブラムシ類	やや多	5
	2 ハスモンヨトウ	並	5
カンキツ (露地栽培)	1 そうか病	並	5
	2 かいよう病	並	5
	3 灰色かび病	並	5
	4 ミカンハダニ	並	6
果樹共通	1 カメムシ類		6
茶	1 炭疽病	やや多	6
	2 カンザワハダニ	やや少	6
	3 チャノコカクモンハマキ	並	6
	4 チャハマキ	並	7
	5 チャノホソガ	並	7
	6 チャノミドリヒメヨコバイ	やや多	8
	7 チャノキイロアザミウマ	やや多	8
	8 ツマゲロアオカスミカメ	やや多	8
	9 クワシロカイガラムシ	並	8

### 作物の生育状況 (4月中旬)

3月の高温の影響により全体的に7～10日生育が早まっている、早期水稲は活着期。冬春きゅうり・冬春ピーマン・冬春トマトは収穫期、茶は開葉～摘採期、かんきつは新梢伸長期で早い圃場では開花期に達している。

### 向こう1か月の気象予報

天気は数日の周期で変わり、気温は平年並の確率40%、降水量は多い確率40%、日照時間は少ない率40%と予想されている。

(1か月予報 鹿児島地方気象台 4月19日発表)

## 発生予報の根拠および防除対策

### 早期水稲

#### 1 葉いもち（並）

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 4月中旬の巡回調査では発生未確認である。  
( 平年値：発生面積率0.0%、発病度0.0 )

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 補植用の取り置き苗は、葉いもちの発生源になるので、補植が終わったら速やかに処分する。  
( 2 ) 曇雨天が続く場合は葉いもちの早期発見に努め、病斑が認められたら速やかに防除する。  
( 3 ) 同一系統薬剤の連用は、薬剤耐性菌が発生しやすいので避ける。

#### 2 イネミズゾウムシ（やや少）

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 4月中旬の発生面積率28.1% ( 平年34.9% ) は平年よりやや少、被害度0.4 ( 平年2.6 ) は平年より少である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 成虫が10株当たり5頭以上のほ場では、粒剤の水面施用を行う。水面施用に当たっては水管理に十分注意し、水深が3cm程度になるように調整するとともに少なくとも4日間はかけ流しや落水はしない。

#### 3 スクミリンゴガイ（やや多）

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 4月中旬の発生面積率40.7% ( 平年17.4% ) は平年より多、 $m^2$ 当たり貝数0.2頭 ( 平年0.5頭 ) は平年並である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 水田の入排水口には金網を張り、貝の侵入を防止する。  
( 2 ) 貝の生息数が多い場合は、捕殺するか粒剤の水面施用を行う。  
( 3 ) 粒剤の水面施用に際しては水管理に十分注意し、水深が3cm程度になるように調整するとともに少なくとも4日間 ( 薬剤によっては7日間 ) はかけ流しや落水はしない。

### 冬春きゅうり

#### 1 べと病（やや多）

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 4月中旬の発生面積率77.0% ( 平年55.7% )、発病葉率20.2% ( 平年11.8% ) はいずれも平年よりやや多である。  
( 2 ) 向こう1か月の降水量は多い確率40%と予想されている。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) ハウス内の換気を良くし、高温多湿にならないように注意する。  
( 2 ) 窒素切れや成り疲れによる草勢の衰えは、発生を助長するので適切な肥培管理に努める。

#### 2 うどんこ病（並）

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 4月中旬の発生面積率38.5% ( 平年30.2% )、発病葉率5.2% ( 平年4.4% ) はいずれも平年並である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 整枝・誘引・老化葉の摘葉等を行い、採光・通風を良くする。  
( 2 ) 耐性菌の発生を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け作用性の異なる薬剤をローテーションで使用する。

### 3 褐斑病 (やや少)

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 4月中旬は1ほ場で微発生である。( 平年発生面積率25.7%、発病葉率4.1% )

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、初期防除を徹底する。
- ( 2 ) 窒素質肥料の多用は、発病を助長し過繁茂になって通風を妨げるが、逆に少ない場合は草勢低下を招くので、適正な肥培管理に努める。
- ( 3 ) ベと病、うどんこ病の発生後には激発することがあるので、両病害の防除を徹底する。

### 4 ミナミキイロアザミウマ (並)

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 4月中旬の発生面積率61.5% ( 平年59.6% )、百葉当たり虫数199.3頭 ( 平年167.9頭 ) はいずれも平年並である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 本虫は薬剤抵抗性を獲得しやすいので、同一薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- ( 2 ) 収穫の終わった発生ハウスは、蒸し込み等により本虫を死滅させ、ハウス外への拡散防止や次期作の発生源を絶つよう努める。
- ( 3 ) 使用薬剤については、地区の防除暦等を参考にするか、西臼杵支庁・各農林振興局 ( 農業改良普及センター ) 等関係機関に問い合わせる。

### 5 黄化えそ病 (MYSV)

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 本病はミナミキイロアザミウマによって永続的に伝搬され、発生後は急激にほ場内外に蔓延するおそれがあることから、今後嚴重な警戒が必要である。
- ( 2 ) 媒介虫であるミナミキイロアザミウマが、圃場外に拡散しないように防除を徹底するとともに、ほ場周辺の除草に努める。
- ( 3 ) 今後気温の上昇に伴いミナミキイロアザミウマの発生が多くなる見込みであるため、ハウスのサイドを開放する際は特に注意する。
- ( 4 ) 本病と疑われる症状が発生した場合は、最寄りの西臼杵支庁・農林振興局 ( 農業改良普及センター ) または病害虫防除・肥料検査センターまで連絡する。

冬春ピ - マン

### 1 うどんこ病 (並)

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 4月中旬の発生面積率30.8% ( 平年54.0% ) は平年よりやや少、発病葉率5.5% ( 平年8.6% ) は平年並である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥しすぎないように注意する。
- ( 2 ) 適切な肥培管理を行い、また、茎葉が過繁茂にならないよう整枝を行い、発病葉は除去する。
- ( 3 ) 収穫終了後は、ハウスを密閉して病葉上の病原菌を高温で死滅させるか、病葉残さを持ち出して処分し、次期作の伝染源を絶つ。

### 2 斑点病 (やや多)

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 4月中旬の発生面積率53.9% ( 平年35.0% ) は平年よりやや多、発病葉率11.3% ( 平年4.0% ) は平年より多である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) ハウス内が高湿多湿にならないように、換気と水管理に注意する。また、整枝を行って茎葉が過繁茂にならないようにする。
- ( 2 ) 病原菌が植物体に侵入した後は、防除効果が上がりにくいので予防散布を行う。

### 3 アザミウマ類 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 4月中旬のミナミキイロアザミウマの発生面積率53.9% ( 平年57.7% )、10花当たり虫数1.3頭 ( 平年2.0頭 ) はいずれも平年並である。
- (2) ヒラズハナアザミウマの発生面積率77.7% ( 平年30.0% )、10花当たり虫数27.3頭 ( 平年8.9頭 ) はいずれも多である。

[防除上の注意]

- (1) ミナミキイロアザミウマの成虫が10花当たり1頭程度寄生すると、販売等級格下げとなる果実が5%発生するので、発見したら早めに防除する。
- (2) ヒラズハナアザミウマは、生息密度が高まると被害が発生するので注意が必要である。
- (3) 今後、気温の上昇とともに例年増加していく時期であるので注意する。
- (4) 施設内では卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、7日間隔で少なくとも3回の連続した防除を行う。
- (5) 両アザミウマの薬剤感受性は異なるので、防除の際は使用する農薬に留意する。
- (6) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。
- (7) 被害の激しい茎葉・果実のハウス外への持ち出し、マルチ被覆、有色粘着トラップの設置により生息密度の低下を図る。

冬春トマト

### 1 灰色かび病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 4月中旬の茎葉での発生面積率50.0% ( 平年58.1% ) は平年並、発病株率13.5% ( 平年10.7% ) は平年よりやや多である。
- (2) 果実調査による発生面積率10.0% ( 平年37.2% ) は平年よりやや少、発病果率0.1% ( 平年3.0% ) は平年より少である。

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- (2) 発病果・被害茎葉は、伝染源となるのでハウス外に持ち出し処分する。
- (3) 薬剤耐性菌が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

### 2 葉かび病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 4月中旬の発生面積率30.0% ( 平年33.7% ) は平年並、発病葉率0.4% ( 平年8.1% ) は平年より少である。

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- (2) 発病初期の防除を徹底する。

### 3 タバココナジラミ類 (ハ<sup>°</sup>イタイ<sup>°</sup>B(シ<sup>°</sup>ル<sup>°</sup>ハ<sup>°</sup>-リ<sup>°</sup>フコ<sup>°</sup>ナ<sup>°</sup>ジ<sup>°</sup>ラ<sup>°</sup>ミ)、ハ<sup>°</sup>イタイ<sup>°</sup>Q) (並)

[予報の根拠]

- (1) 4月中旬の発生面積率30.0% ( 平年31.0% )、100葉当たり虫数1.7頭 ( 平年4.7頭 ) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 気温の上昇に伴い増殖に好適な条件となるため、黄色粘着トラップ等を設置し、本虫の早期発見・早期防除に努め密度を抑制する。
- (2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度のうちに防除する。
- (3) 本虫に効果のある殺虫剤が少ないことから、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。
- (4) 有効な薬剤に対する抵抗性の発現を回避する観点から、同一系統薬剤の連用を極力避け、ローテーション散布を心がける。また、抵抗性発現の可能性が低い微生物農薬や物理的に窒息死させる気門封鎖型殺虫剤を防除体系に組み込む。
- (5) 栽培終了後は、蒸し込み等により本虫を死滅させ、ハウス外への拡散防止や次期

作の発生源を絶つよう努める。

- (6) ハウス周辺の雑草は休閒期のタバココナジラミ類の生息場所となり、次作への伝染源となるので除草を徹底する。また、ほ場周辺に持ち出したトマト残さ及び野良生えのトマト等には特に注意する。

#### 4 トマト黄化葉巻病 (TYLCV) (前年、前々年と同程度)

[予報の根拠]

- (1) 4月中旬の巡回調査を行った10地点では発生を確認しなかった。  
(発生面積率：前年0.0%、前々年0.0%、発病株率：前年0.0%、前々年0.0%)

[防除上の注意]

- (1) 発病株は伝染源になるので根ごと抜き取り、土中に埋めるかビニル袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在しているので、発病部位を除去しても伝染源になるため、必ず株全体を除去する。

野菜・工芸作物全般

#### 1 アブラムシ類 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 4月中旬の冬春ピーマンでの発生面積率15.4%(平年5.6%)は平年より多、50芯当たり虫数4.9頭(平年1.5頭)は平年よりやや多である。

- (2) 4月中旬のジャガイモの巡回調査での発生面積率70.0%(平年19.2%)は平年より多、寄生度2.3(平年0.9)は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

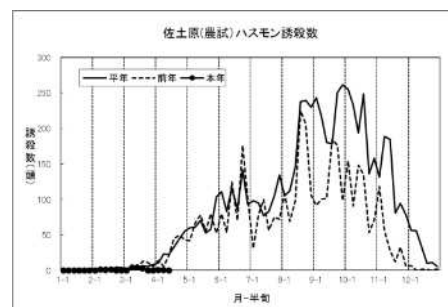
- (1) ウイルス病を媒介するので 早期発見・防除に努める。

#### 2 ハスモンヨトウ (並)

[予報の根拠]

- (1) フェロモントラップによる誘殺数(佐土原)は、平年並である。(右図参照)

カンキツ(露地栽培)



#### 1 そうか病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 4月中旬の巡回調査では発生未確認である。  
(初発生日：前年5/10、平年5/5)

[防除上の注意]

- (1) 罹病した枝葉は伝染源になるので、発見したら直ちに剪除する。  
(2) 今後の防除適期は、落弁期・幼果期である。

#### 2 かいよう病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 4月中旬の巡回調査では発生未確認である。  
(初発生日：前年5/18、平年5/8)

[防除上の注意]

- (1) 罹病した枝葉は伝染源になるので、発見したら直ちに剪除する。  
(2) 今後の防除適期は、開花直前・落花後・梅雨期・秋芽生育期である。

#### 3 灰色かび病

[防除上の注意]

- (1) 防除適期は落弁期である。また、開花期から落弁期にかけての降雨は、本病の発生に好条件となるので特に注意が必要である。  
(2) 幼果表面に付着した発病花弁から幼果に伝染するので、枝をゆするなどしてできるだけ花弁の離脱を促す。

#### 4 ミカンハダニ (並)

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 4月中旬の発生面積率33.4% ( 平年32.6% )、寄生葉率12.1% ( 平年7.2% ) はいずれも平年並である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 生息密度が高くなると防除が困難になるので、寄生葉率30% ( 1葉当たり虫数0.5~1頭 ) を目安に防除を行う。

果樹共通

#### 1 カメムシ類

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 果樹カメムシ類は園外から飛来し、地域や時期によって発生量が大きく変動するので、ウメやモモなどの結実中の果樹類では飛来に注意し、初期防除を徹底する。

茶

#### 1 炭疽病 (やや多)

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 4月中旬の発生面積率46.2% ( 平年20.0% )、 $m^2$ 当たり病葉数3.9枚 ( 平年1.4枚 ) はいずれも平年よりやや多である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 一番茶摘採後の基幹防除を徹底する。

#### 2 カンザワハダニ (やや少)

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 4月中旬の発生面積率23.1% ( 平年46.3% )、寄生葉率0.8% ( 平年5.3% ) はいずれも平年よりやや少である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 同一薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤をロ - テ - ションで使用する。  
( 2 ) 合ピレ剤の使用は、リサ - ジェンスが発生しやすいので注意が必要である。

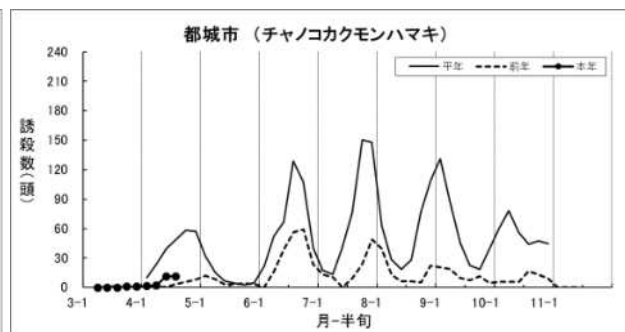
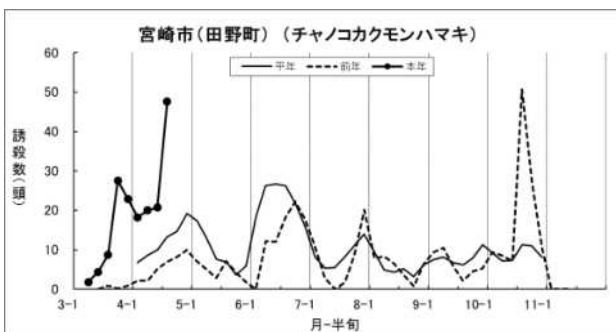
#### 3 チャノコカクモンハマキ (並)

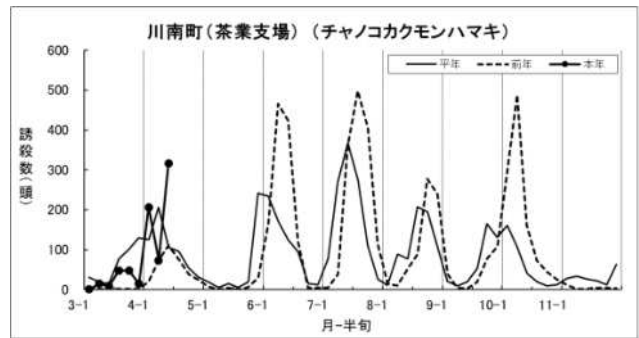
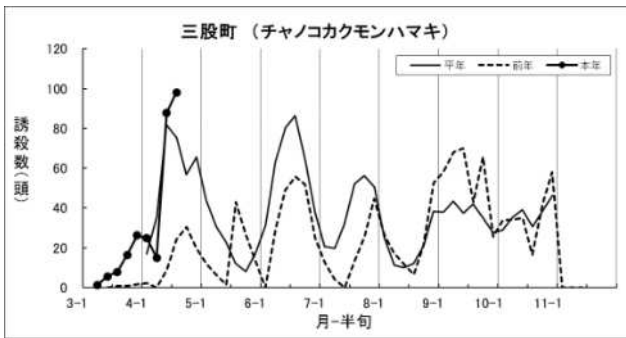
[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 4月中旬の巡回調査では発生未確認である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) フェロモントラップによる誘殺状況では、平年並の発生である。  
( 2 ) 顆粒病ウイルスによる防除適期は、第1世代に対しては越冬世代の発蛾最盛期の17日後、第2世代に対しては第1世代の発蛾最盛期の10日後である。





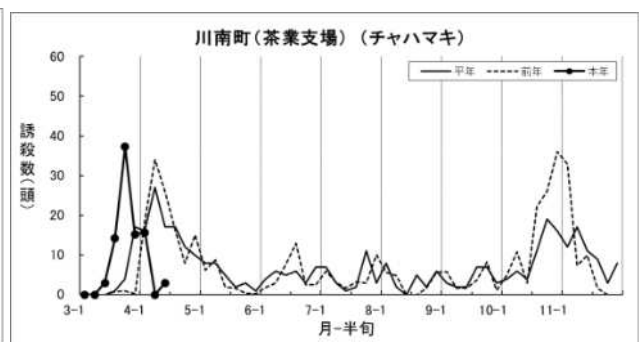
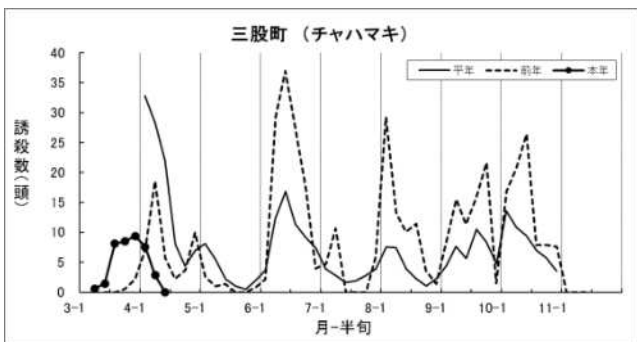
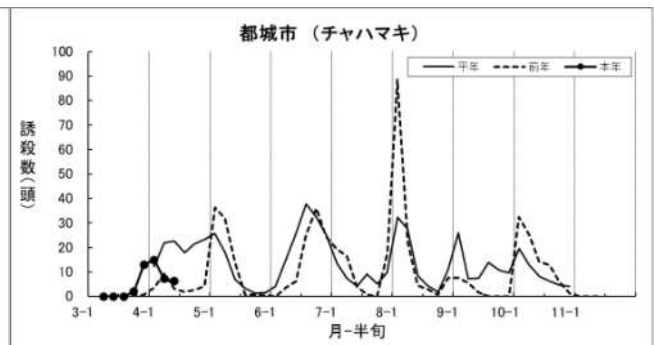
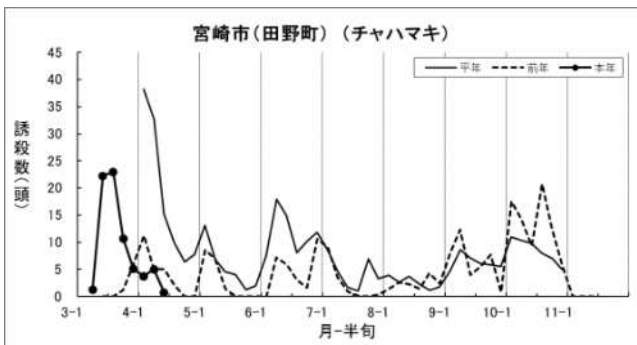
#### 4 チャハマキ (並)

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 4月中旬の巡回調査では発生未確認である。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) フェロモントラップによる誘殺状況では、発蛾最盛期は田野町では3月第4半旬、都城市では4月第1半旬、三股町では3月第6半旬、川南町では3月第5半旬であったと考えられる。



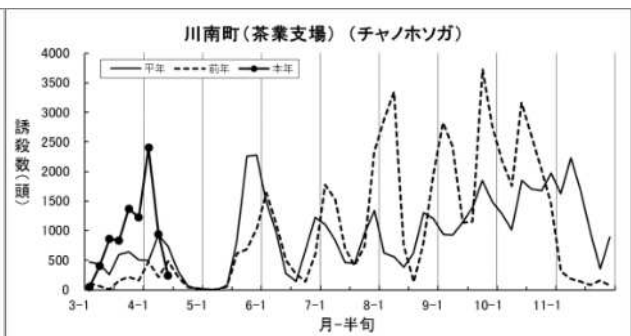
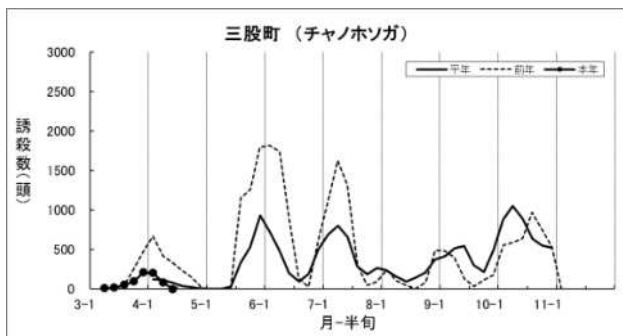
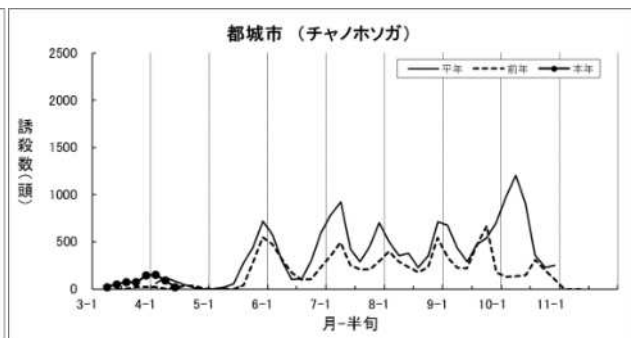
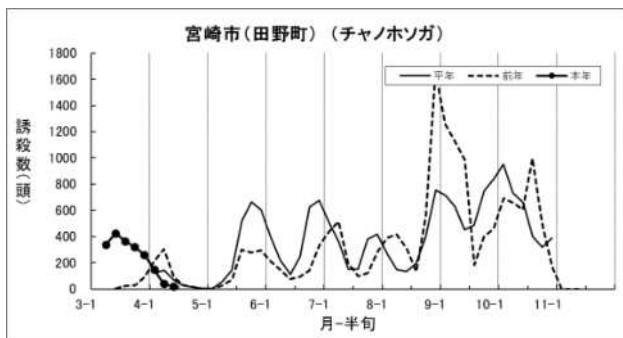
#### 5 チャノホソガ (並)

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 4月中旬の巡回調査では発生未確認である。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) フェロモントラップによる誘殺状況では、田野町は3月第3半旬、都城市、三股町、川南町は4月第1半旬が発蛾最盛期であったと考えられる。ほ場での発生状況を確認し、巻葉前に防除する。



## 6 チャノミドリヒメヨコバイ (やや多)

[ 予報の根拠 ]

- (1) 4月中旬の見取り調査では、発生未確認である。
- (2) 払い落としによる調査では、発生面積率15.4% ( 平年5.9% )、払落虫数0.2頭 ( 平年0.1頭 ) はいずれも平年よりやや多である。

[ 防除上の注意 ]

- (1) 例年二番茶期から発生が増えてくるので注意する。

## 7 チャノキイロアザミウマ (やや多)

[ 予報の根拠 ]

- (1) 4月中旬の見取り調査では、発生面積率23.1% ( 平年13.5% ) は平年より多、寄生葉率2.5% ( 平年0.7% ) は平年よりやや多である。
- (2) 払い落としによる調査では、発生面積率15.4% ( 平年30.1% ) は平年並、払落虫数3.0頭 ( 平年1.4頭 ) は平年よりやや多である

[ 防除上の注意 ]

- (1) 二番茶期に向けた防除対策に重点をおく。

## 8 ツマグロアオカスミカメ (やや多)

[ 予報の根拠 ]

- (1) 4月中旬の発生面積率53.8% ( 平年20.0% )、 $m^2$ 当たり被害葉数4.9葉 ( 平年1.1葉 ) はいずれも平年より多である。

[ 防除上の注意 ]

- (1) 茶以外の植物にも寄生するため、ほ場周りの除草を行う。

## 9 クワシロカイガラムシ (並)

[ 予報の根拠 ]

- (1) 4月中旬の発生面積率23.1% ( 平年38.2% )、寄生株率6.9% ( 平年14.0% ) はいずれも平年並である。

[ 防除上の注意 ]

- (1) 第1世代幼虫の防除適期は、幼虫ふ化開始から2週間後または幼虫ふ化最盛期であるので、ふ化状況をよく観察し防除する。
- (2) 薬剤散布量は、成園で10a当たり1,000リットルを目安に、枝幹に十分かかるように丁寧に行う。



(注) 微発生とは、生息が確認されるが発生面積として換算する基準値に達しない密度の発生状況をいう。

### その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。  
宮崎県農薬安全使用啓発ホームページ  
<http://nouyaku-tekisei.pref.miyazaki.lg.jp/nouyaku/user/top/miyazaki>  
日本植物防疫協会ホームページ <http://www.jpnpn.ne.jp>  
農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>  
農林水産消費安全技術センターホームページ  
<http://www.acis.famic.go.jp/>
- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。
- 3 発生量(程度)の区分  
多 い (高 い) やや多いの外側 10%の度数の入る幅  
やや多い (やや高い) 平年並の外側 20%の度数の入る幅  
平年並 平年値を中心として 40%の度数の入る幅  
やや少ない (やや低い) 平年並の外側 20%の度数の入る幅  
少 ない (低 い) やや少ないの外側 10%の度数の入る幅  
(平年値は過去 10年間の平均)
- 4 予察情報の種類  
病虫害防除・肥料検査センターから発表する情報は次の 5 つです。  
(1) 予 報・・・向こう 1 か月の発生状況を予測し、毎月 25 日前後に発表する。  
(2) 注 意 報・・・主要な病虫害の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。  
(3) 警 報・・・主要な病虫害の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。  
(4) 特 殊 報・・・県内で初めて発生を認めた病虫害がある時や病虫害の発生様相が特異な時に発表する。  
(5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や各種の防除技術指導情報について随時発表する。

### お知らせ

病虫害防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。  
ホームページアドレスは、<http://www.jpnpn.ne.jp/miyazaki/>です。

#### 【文書取扱】

病虫害防除・肥料検査センター 倉富  
TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-2127  
E-mail: byogaichu-hiryu  
@pref.miyazaki.lg.jp